
sense less...

天月黎璽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

senseless...

【Nコード】

N4069D

【作者名】

天月黎璽

【あらすじ】

アカ「い部屋、アカ」のメール 人を救おうとしない少年と、人を救いたい少女 -

受信

男はメールを待っていた。女からの、と、いつても恋人ではない男曰く、女「友達」である。その友達が男には何人かいる。男にとっても、相手にとっても、お互いに非常に都合のよい関係である。高校生、いや、中学生の頃よりもまだ前かもしれない、その頃からずっとこの男はこの様な調子であつた。明日、「友達」がショッピングをするので、一緒に付き合つてくれないかとの誘いのメールがきた。男は一つ返事で承諾した。そこからやりとりが盛り上がり、いつの間にか時刻は23時を回っていた。

メールをしながら男はあれこれ考えていた。その内容のほとんどは、シヨッピングの後のことである。メールの内容、明日のシヨッピング自体のこともちゃんと考えていた。だが、それは全てシヨッピングの後の事への布石にすぎない。そうして、シヨッピングはどこかへ吹っ飛んでしまい、その後のことだけが残り、全てを占めるのだらう。

男が色々空想を巡らせていると、着信をしらせるバイブ音が部屋に薄らと響いた。画面に出た差出人は女ではなかった。高校時代からの親友であった。相手は、いわゆる悪友というやつである。別段、珍しいことではない。何の疑問も持たなかった。躊躇なく開封した。それが失敗だった。

「!?!?」

「!!?!?」

「何だコレ……っ!?!?」

何かを、部屋の中に何かを感じた。

感じたものが何かを知ったときには、カーペットに血が飛んでいた。

そうして、壁が、窓が、天井が、部屋が赤く染まっていた。

噂

「ねえ、見た？今朝のニュース。あの連続殺人事件の。」

「見た見た。昨日また起きたんだよね。」

「よお。お前らもその話か。」

「俺も見たぜ。今朝やってたやつだろ？」

「今度のも、また、同じ手口で、」

「そう。全身ズタズタに切り裂かれて、」

「辺り一面血の海で、」

「辺り一面どころか、部屋中、真っ赤になってよ、」

「ねえ。知ってる？あの『噂』。」

「知ってる！『アレ』だろ？」

「『メールのやつ』でしょ？」

「『アレ』知らねえ奴なんて、今いねえだろ？」

「だよー！」

「だって、『アレ』、今スゲー話題になってんじゃん。」

「この地区だけじゃなくて、この街の連中皆知ってるし。」

「この街だけじゃないって！もう、隣の高校でも知らない奴いな
いってさ。」

「ねえ。あの『噂』、本当だと思う？」

「ぜってえ、マジだろ？」

「俺もそう思う。」

俺、最初信じてなかったさ。けど、ここまできたら、信じるしかないっしょ?！」

「だよねー?!」

「『アカのメール』の、噂は、真実だった!？」

「キヤアアア！」

「ウオォー!？」

「やっつべえ！マジ怖えええええ！」

「ある日、突然、送られてくる『謎のメール』」。

「それを開くと、何処からか、包丁を持った女が現れて、」

「馬鹿！包丁じゃなくて、鋏だよ。」

「はっ？お前、それ『口裂け女』だぞ。」

「お前が馬鹿じゃん。」

「ああゝ。どっちだっていいよ！そんなこと。」

「とにかく。ソイツが現れて、メールを開いた本人を、ズツタズタに切り裂くんだろ？」

「そう。ズタズタに切り裂いて、部屋一面を血で真っ赤にするの。」

「それで、そのメールの事を『アカのメール』って言うんだって。」

都市伝説

そのメールは突然送られてくる。

メールを開くと、「何か」が遣つて来て。

そうして、受取人をズタズタに切り裂いて。

「何か」は、辺り一面を血の海に変えてゆく。

これが「アカのメール」である。

現代において必要不可欠なツールとまでなっている「メール機能」に「口裂け女」や「テケテケ」、「赤マント」といった、既存の都市伝説が組み合わされて生まれたものであると考えられている。

この都市伝説の特徴として、次のような事が言われている。

- 1 ・一度受信すると削除してもまたすぐにメールが送られてくる。
- 2 ・受信拒否機能の無効。
- 3 ・メールアドレスを変更しても送られてくる。
- 4 ・パソコンや携帯電話その物を変えても送られてくる。
- 5 ・送られてきたメールを開けないでいると、二週間以内に受取人は自殺してしまう。

この他にも「不幸の手紙と同じで、誰かに送れば回避できる。」
「メールをすぐに返信すれば回避できる。」といった様々な諸説が

飛び交うが、上記の五つは代表的なものとして人々に噂されている。

比較的最近、主に中高生の間で噂されるようになった新しい都市伝説ではあるが、その内容と酷似すると思われる「事件」が多数あり、世間一般に知られる事となる。

だが、上記に挙げた特徴にある様に、「死が回避出来ない」とされながら「回避の方法が存在する」という矛盾から、「あくまでも噂」の域を出ない。

また、この事から、先に述べた様に、誰かが既存の都市伝説から創りあげた「二次創作」である事が言えてしまう。

朝

私は今年の春で高校三年生になる。新年度の始まりは、新しい私の始まりを意味している。でも、今年は今までと違った。何かが違った。それは、単に「事件」の事だけではなくて。

私が想像できなかった、誰も想像できなかった始まりだった。そんな気がした朝の登校風景。

「昨日の夜のニュース観たか？」

「ああ。今朝もやってたしな。」

「謎の連続殺人犯とか言ってるけどさ、絶対『アカのメール』だって。」

「だよな。絶対犯人とか見つかんねーし。」

朝から数人の男子学生が「ある事件」の話題で盛り上がり、騒いでいる。

「皆、話す事といったらその事ばかり。」

この所、私の身の回りの話題と言えば、その「アカのメール」に関する物がほとんどだった。その男子学生達だけではなく、周りにいる人達、皆が、その話をしている様であった。

「沢山の人が死んでいるのに。それも、私達の身の回りで。」

「なのに、なんで、そんなに騒いでいられるの？」

「皆、『怖い』とか、感じないの？」

「…うん。そう。きつと。」

「皆、そんな事、考えて、いない。」

「自分には、無関係だと思ってる。」

「だから。」

「だから、あんな風に」

「平気で騒いでいられる。」

「え?!」

咄嗟に、声のした方へ振り向く。そこには少年が立っていた。自分と歳が近い、でも、自分よりも一つ、二つ、歳が上の様に見えた。長い髪の所為かもしれない。

少年はさらに続けた。

「対岸の火事。」

「自分の身の回りで起きている事であろうと、あくまでも自分とは無関係だと思っている。」

「だから、あんな風に、愉しげに騒いでいられる。」

「そうは思わないか？」

そう言くと、少しこちらに顔を向けた。

「え…。あ、あの…。」

立ち止まっていた少年は、前へ向き直り、歩き出した。

「待って下さい！」

私がそう言つのも聞かず、少年はその場を立ち去って行ってしまった。

「……………」

「行っちゃった…。」

「何だったんだろう。」

暫くその場に立ち尽くしていたが、ある事実気付く。

「…あれ？」

「誰も居ない…。」

「……………」

「あつ！」

「そうだ！学校！」

慌てて駆け出す。さっきの事が有るとはいえ、こんな大事な事を忘れるなんて、我ながら情けない。

「ハアツ。ハアツ。」

「新年度早々、しかも、初日から遅刻は不味いよお！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4069d/>

sense less...

2010年12月22日14時49分発行